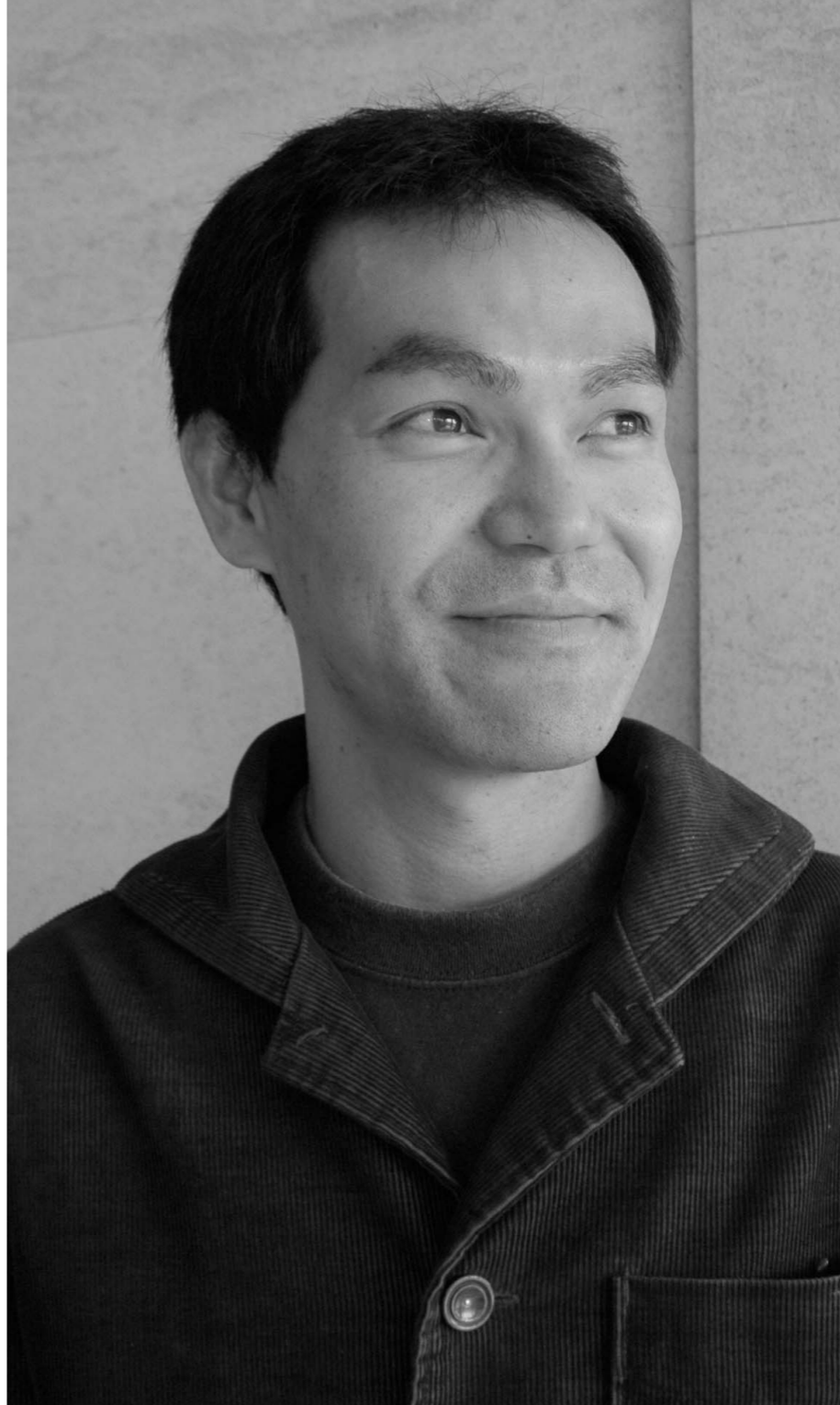


「途上国の建設現場に 日本の技術を伝えたい」

日本からはるか遠く離れたアフリカ中東部、ルワンダ。外国人が一人もいない地域の建設現場で、人々とともに汗を流す日本人青年がいた。向井潔さんは、大学、社会人時代に培った土木建築の知識と技術を生かし、青年海外協力隊に参加。ルワンダの大地に、人々の心に、確かな軌跡を残した。



建設会社を経て 協力隊へ

2008年3月27日、関西国際空港に降り立った一人の日本人。小さなスーツケース一つと身軽ながらも、たくましく日焼けした姿が印象的だ。「出発のときも荷物少なかったんですよ。この中身も10キロくらい。スカス力ですよ」と笑うのは、06年4月から、青年海外協力隊としてルワンダに派遣されていた向

井潔さん。この日、2年ぶりに日本の地を踏んだ。

協力隊を志すきっかけとなったのは、大学2年生のとき。海外旅行にあこがれ、3週間カンボジアへ旅に出た。カンボジアを選んだのは、遺跡が好きだったのと物価が安いという理由から。「学生なのでお金もあまりなくて。宿代を浮かせるために、現地の人の家にホームステイさせてもらいました」。偶然、その家の人は土木関係の仕事をしており、宿代の代わりに仕事を手

設計を描いていた向井さん。しかし、カンボジアから帰国して

次第に「土木建築の現場で途上国に貢献したい」と思っようになった。そしてたどり着いたのが、青年海外協力隊。就職活動も「協力隊に参加するにはどうしたらいいか」を考えて動いた。「建築業界では実務経験がすべて。大手の建設会社だと、現場の責任者を任されるまで最低10年かかる。だから、地元大阪の中規模の建設会社に就職することにしました」。

仕事もやりがいがある」と聞き、不安は期待に変わっていった。

06年4月1日、キガリ国際空港に到着し、飛行機を降りると、さわやかな風が彼のほおをなでた。「アフリカなのに、涼しくて驚きました」。市内に入ると、道路は舗装され、建物が立ち並んでいる。それまでイメージしていた「アフリカ」とは違う風景があった。

問題だらけの 建設現場

しかし、その夜、「やっぱりアフリカ」と思った出来事がある。「家にゴキブリが33匹も出たんです。それはもうびっくりで（笑）」。

波乱が予想されるアフリカ生活が始まった。

伝つことに、「専攻の仕事が海外で経験できる」と勇んで現場に向かったものの、何かおかしい。作業員は何をしていいのかわからないよつで、工事が進んでいないのだ。指導できる人

いわれる「現場監督」がいらない。もっと効果的な方法があるのにと思いながら、何もできなくて。後悔が残る旅だった。

卒業後は大手企業に就職してお金を稼いで・・・という将来が残る旅だった。

派遣先がルワンダと決まったとき、頭に浮かんだのが「虐殺のイメージ。独立前後からフツ族とツチ族の対立が続いていたルワンダでは、1994年に「1000日間で100万人」ともいわれる凄惨な虐殺が行われた。向井さんは本当にそんな所に行けるのか心配したが、現地のICA専門家から「危険はな

技術革新移転センター支部の建設現場で、同僚と打ち合わせをする向井さん。「任期中に工事を再開できなかったのが唯一の心残り。数年後、ルワンダに戻って、完成した建物をこの目で確かめたい」



Mukai Kiyoshi

青年海外協力隊OB

向井 潔

挑戦者たち
Stories of
Challengers
Vol.31



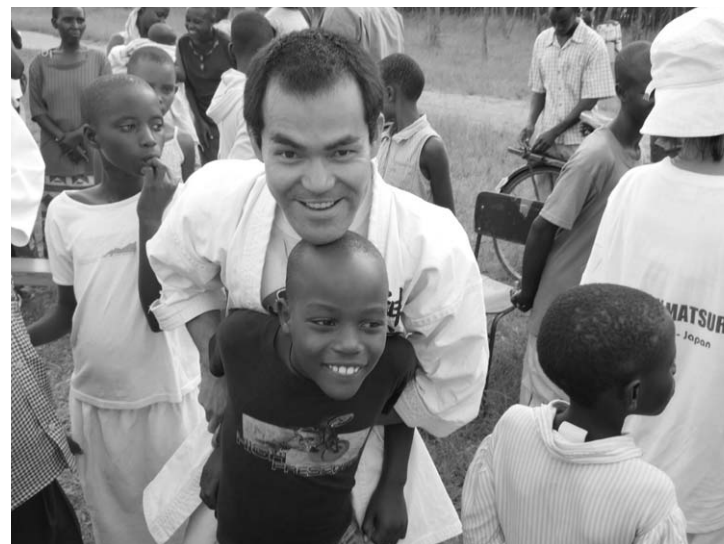
ルワンダに日本食レストランはないが、日本食に興味を持つ人は多い。向井さんは現地の人を自宅に招待して日本食を振る舞い、はしの使い方も教えた

監督と作業員、互いに「チームワーク」の概念がまったくない。監督はほとんど現場におらず、作業は図面がすべて。途中で問題が発生しても、変更はきかない。しかも、予算不足が浮上し、工事はストップしてしまっ

た。だが、そこで

落ち込んではいられない。彼は同時進行で取り組んでいたバイオガスタシクの改良工事を成功させようと気持ちを切り替える。ルワンダは、アフリカ随一のバイオガスエネルギー導入国。政府も環境対策の一環として力を入れており、海外でその技術を学ぶ技術者も多い。しかし、向井さんは日本で経験したことがなく、分からないことだらけだった。国最先端のプロジェクトに携われるという喜びの反面、不安も大きかった。工事を任せられたのは、キガリ市内のキミロンゴ刑務所。生こ

みや排泄物からバイオガスを生成し、囚人の食事を調理するためのエネルギーとして利用。従来使用していた薪燃料を60%削減することに成功した。だが、導入から1年、ガス発生時に出る排水のにおいが問題に。「この水から出るにおいを何とかしてくれ」。それが要請内容だった。ルワンダの就業時間は、朝9時から夕方5時まで。向井さんは仕事が終わると、インターネットなどを活用して情報収集に励んだ。元の職場の上司にも、メールなどでアドバイスを受けた。苦勞に苦勞を重ね、何とか施工計画書を完成させたが、着工目前にして問題が発生。あるはずの予算が下りてこない。向井さんは何度も担当者に会いに行き、計画書を手説明を繰り返した。「なかなか許可が出な



現地の人との交流の場として、1~2カ月に1回、協力隊の仲間と「日本祭り」を開催。柔道の有段者である向井さんは「JUDO」パフォーマンスを披露。子どもたちに大好評だった。「協力隊の任務は、日本を知ってもらうことでもある」と言う



キミロンゴ刑務所のバイオガスタシク改良プロジェクトの現場。向井さんはできるだけ現地語のキニアルワンダ語で話し、作業員との距離を縮めるよう努めた。彼らも「キヨシと一緒に働くことができてうれしい」と言ってくれた

大変でした。だが、現場の責任者として、決して弱音を吐かなかった。

そして開始から10カ月後に完成。「タンクに水を引き入れると、計画通りきれいに流れて。技術者なら誰もが感じる感動の瞬間でした。その後も何度となく足を運び、うまく機能しているかを確認した。そのたびに「やったぞ」という達成感が込み上げてきた。

何事にも誠実に全力投球で取り組み彼は、同僚たちからの信頼も厚かった。プロジェクトの合間には、土木建築に関する勉強会を開いた。「教えるためには、勉強しなければならぬ。自分にとっての知識を整理する機会になってよかったです」。

向井さんは、任期終了が近づくとつれて、ルワンダでの活動に確かな手こたえを感じていた。

次の目標に向かって

2年間の任務を全うし、帰

て。1カ月くらい通いました。結局、予算は当初の予定から大幅に削減され、施工期間も切り詰められた。普通に工事したのでは、到底間に合わない。向井さんは、作業員を増やしたり、作業工程を組み替えたり、どうにか竣工を早められないかと頭をひねった。プロジェクトを成功させたい一心だった。「途中で辞めていく人も多くて。そのたびに方針転換を余儀なくされて

国した今、協力隊に参加したことを、「一言で言うところよくやった。仕事での達成感ももちろん、向井潔という一人の日本人を通じて、日本に興味を持ってくれたことがうれしかった」と話す。

そして彼自身の中でも、何かが大きく変わった。日本で働いているときは受け身的で、仕事は上から与えられるものだと思っていた。しかし、ルワンダで自分から動かなければ何も始まらないということ学んだ。日本に帰国して2週間後、向井さんはカンボジアを再訪した。「大学時代、自分の原点となった場所に行つて、自分を見つめ直してみたいんです」。

次の道については、「土木建築が大好きなので、この分野だけは絶対譲れない。日本の建築業界も、国際協力で積極的に参入している。今後はそういう仕事に携わりたい」と意気込む。協力隊という夢を達成した今、向井さんはすでに次の目標に向かって歩き始めている。



ルワンダ人の友人たちと。「ルワンダ人は日本人と似ていて、最初はあまり自分の意見を言わないんです。でも、親しくなるうちにだんだん心を開いてくれて、深い話までするようになりました」

教えることによつて、自分も学べる。ルワンダは僕を変えてくれた場所です

Mukai Kiyoshi

むかい・きよし 1978年大阪府出身。2001年大阪工業大学工学部土木工学科(現都市デザイン工学科)卒業。大阪の建設会社に4年半勤務した後、青年海外協力隊に応募。06年4月より、上下水道設計施工隊員としてルワンダに派遣され、首都キガリを拠点に公共施設の建設プロジェクトに携わる。08年3月末に任期を終えて帰国。